

実践報告

大学生における自然体験活動の教育的効果について ——自然活動論・アウトドア実習の授業内からの一考察——

On the educational effect of nature experience activities in university students:
A Study of Natural Activity Theory and Outdoor Training Class Contents

井口 成明*・佐藤 国正¹・廣川 充志¹

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2020年9月12日 受理)

I. 緒言

近年、発生している自然災害をみると、人類が初めて体験するような想定外規模の災害が発生している。

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、津波によって海岸に碇泊していた貨物船等が多くの住宅をなぎ倒し、石油タンカー爆発で一面を火の海にしてしまった。多くの尊い命を奪い、災害から8年を経過した現在でも復興は完了していない。また、2019年9月9日に千葉県房総半島付近に上陸した台風15号は、強風と豪雨により甚大な被害を千葉県南部に与えた。更に10月7日、静岡県に上陸し、関東、東北地域を横断した台風19号は、死亡、行方不明者が102名に上り、重軽傷者を合わせると500名以上の大災害となった。文明の進歩に伴う自然破壊では、温室効果ガスであるCO²の大量発生を世界各地で生み、地球温暖化の影響ともいえる夏場

の炎天下によって、熱中症、熱射病の危険性が増大してきている。前述した台風の発生も海水温の上昇によることで、発生数、規模共に増大している。これに反し、日本の子供たちの遊びは、多人数で、外で遊ぶ子供たちは減少し、少人数で、室内で遊ぶことが多くなった。その原因となった1985年のファミリコンピュータの誕生は、子どもたちをテレビ画面の前に釘付けにし、1990年から子どもの体力測定結果は下降の一途をたどった。ここ5年度で下げ止まりはしたものの上昇には向いていない。中村¹⁾は、2007年に保育園児(3～5歳)123名の遊びの様子を撮影し、どの程度の速さで走っているのか、どれくらい飛び跳ねているのか、どの程度投げているのかを分析した結果を、同様に1985年に児童164名を撮影して分析した結果と比べている。結果は1985年では平均13.8点取っていたが、2007年には9.3点まで下がっている。同様に4歳児は20.2点から12.1点に、5歳児では23.7点から14.6点まで下がっていた。

* IGUCHI Nariaki: Associate Professor, Faculty of Culture and Sport Policy, Toin University of Yokohama. 1614, Kurogane-cho, Aoba-ku, Yokohama 225-8503, Japan

¹ SATOU Kunimasa: Lecturer, Faculty of Culture and Sport Policy, Toin University of Yokohama

¹ HIROKAWA Mitsushi: Associate Professor, Faculty of Culture and Sport Policy, Toin University of Yokohama

当時5歳児だった幼児が現在17歳、そこから考察すると本学在学中の学生の幼児期における活動度数もほぼ同様の水準といえる。

また、環境的にも子どもたちが遊びまわれる児童公園等は、年々減少傾向にあり、地域に児童公園があるところでも、運動制限、ボール投げ禁止等の条件が付けられていることが多くなってきている。また、外食産業、加工食品数の増加は、日本人を肥満傾向に追い込み、運動量の低下も相まって、50年前の日本人の平均体温より一度ほど低下している。平均体温の低下は、体力の低下のみでなく、免疫力の低下も起こしていると医師の石原²⁾はその著書で述べている。

以上のような理由から児童、生徒を室内で遊ばせ、自然から乖離させて生活させることは、将来的に危険なことと筆者は考える。自然災害の頻度と日本人の体力は反比例しており、自然環境は高温多湿で人類の生命限界に迫り始めているようだ。将来の希望職業が、体育教師やスポーツ、運動指導者を目指している本学学生にとって屋外で遊び、災害時の適切な誘導、指導は喫緊の課題であるといえる。2011年の東日本大震災では、避難場所をめぐり、教職員間で裏山へ逃げるといった意見と、校庭にとどまり続けるという意見が対立した、宮城県石巻市立大川小学校で、校庭に留まった児童74名教師10名がなくなるという惨事になってしまった。

これからの学校教師は、環境悪化を理解、想定し、大災害から児童、生徒を守るため常に心身を鍛え、災害のための備えに心がける必要がある。しかし現状を見ると、本学に入学してくる学生も小、中、高等学校時代は世間一般通り、室内でゲーム等を少数で行っていた者と、専門種目のスポーツを英才的に行っていた学生が多いことがうかがえる。今回、スポーツ教育学科学生88名とスポーツ健康政策学科43名が、それぞれの実習で、自然活動を体験し、将来指導者になる時まで何に身を着け、体験しておくことが必要なのかを理解し、その後の活動に活かしていける資

質を育ませることを目標にこの実習を実施した。

Ⅱ. 研究目的と方法

1. 目的

本研究は、桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部開講科目である自然活動論またはアウトドア実習Ⅱの履修者スポーツ教育学科とスポーツ健康政策学科の131名を対象に、出身学校（小、中、高等学校）時代における自然体験活動の体験頻度とその内容について事前の質問調査によって把握する。その後本学の集中講義である「自然活動論」と「アウトドア実習Ⅱ」に参加したことによって、自然体験活動の重要性を理解し、楽しく、意欲的に取り組むことができたか。更に近い将来、指導者として自然体験の重要性を理解し、自らが教える児童・生徒たちに自然と共に生き、自然災害に遭遇した時でも正しい判断と技術を駆使し、子どもたちに前向きに接することのできる指導技術、自然感覚を習得することができたか。最後に学生の体験活動後の意識変化を、事後調査用紙から読み取り、今後の自然体験指導内容に生かしていくところにある。

2. 方法

今回の実習に参加する学生の自然活動体験の有無、外あそび、アウトドアライフスキル等について、実習前に質問調査を行った。その後それぞれの学科での実習を経験し、自然活動のアクティビィーにどのくらい理解を示し、楽しさを理解しその重要度を感じてくれたかを実習後の質問調査で明らかにした。

【実習前の学生の自然体験活動経験と意識調査】

それぞれの実習前に、学生が今までどの程度の自然体験活動を体験してきたかを、以下の質問事項で調査することにした。

【質問1：大学以前の自然体験活動について】

あなたが小学、中学、高校それぞれの時代において学校行事（授業）として実施さ

れた自然体験活動と地域、民間教育団体の教育プログラムに参加した経験があれば答えなさい。(複数回答可)

a: 林間学校, b: 臨海学校, c: 登山, d: スキー実習, e: 飯盒炊飯(野外調理), f: キャンプ(テント泊), g: トレールラン(ロングウォーク), h: スキューバーダイビング, i: カヌー, j: その他, k: 実習無し

【質問1の結果：スポーツ教育学科／スポーツ健康政策学科】

表1 自然体験活動の経験数

| 学校行事としての体験 | (学校以外のところでの体験) | | | | | |
|---------------|----------------|-------|-------|------|------|------|
| | 小学校 | 中学校 | 高等学校 | 小学時代 | 中学時代 | 高校時代 |
| a 林間学校 | 51/20 | 24/4 | 6/1 | 1/4 | 0/0 | 1/0 |
| b 臨海学校 | 11/6 | 1/1 | 1/0 | 1/1 | 0/1 | 0/0 |
| c 登山 | 19/9 | 13/2 | 4/4 | 4/3 | 6/1 | 1/1 |
| d スキー実習 | 9/7 | 17/8 | 11/4 | 5/5 | 1/4 | 0/0 |
| e 飯盒炊飯 | 53/18 | 43/10 | 17/7 | 11/4 | 1/6 | 1/4 |
| f キャンプ | 7/4 | 4/2 | 1/4 | 10/5 | 2/0 | 1/1 |
| g ロングウォーク | 5/1 | 7/1 | 5/1 | 0/0 | 0/0 | 0/0 |
| h スキューバーダイビング | 0/0 | 0/0 | 4/2 | 0/0 | 0/0 | 0/3 |
| i カヌー | 4/3 | 2/2 | 12/4 | 0/1 | 0/1 | 1/2 |
| j その他 | 0/0 | 1/0 | 3/0 | 0/0 | 0/1 | 0/0 |
| k 実習無し | 11/4 | 24/9 | 46/15 | 68/4 | 84/4 | 85/5 |

表1から、スポーツ教育学科、スポーツ健康政策学科共に義務教育時代の学校の教育活動までで、自然体験活動は半数以下になることが分かる。また、個人的に家族、友人との自然活動は、キャンプ、飯盒炊飯が15%ほどの学生が中学生までに体験しているが、高校生になるとほとんどアウトドアレジャースポーツも含め実施していないことがわかった。この状況からでは、自然の驚異はもちろんのこと、自然の中で身体まるごと楽しむ姿勢すら体験していない学生がほとんどであることが分かった。

【質問2：自然体験活動および災害時に対応するための技術習得について】

あなたが現在までにおいて身につけたと思われる技術を、下記の5段階で自らの経験を評価しなさい。

1: 全く経験無, 2: 数回(1~2)経験有ができない, 3: 初歩的なことはできる, 4: 経験あり技術もできる, 5: 専門的領域

までできる

【質問2の結果：スポーツ教育学科／スポーツ健康政策学科】

表2 災害時対応するための技術習得について

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|----------------------------|-------|-------|------|-----|-----|
| 1 ビバーク(テンディングを含めた居住空間作り) | 71/33 | 5/7 | 12/1 | 2/0 | 0/0 |
| 2 災害時生活体験(災害時を想定した体育館宿泊など) | 66/26 | 14/9 | 8/6 | 2/0 | 0/0 |
| 3 クラフト(自然物から生活用品などを作り出す) | 55/22 | 29/14 | 3/5 | 3/0 | 0/0 |
| 4 アウトドアクッキング | 37/18 | 31/13 | 24/7 | 1/3 | 0/0 |
| 5 ロープワーク(ロープの使い方) | 72/37 | 16/1 | 2/2 | 1/1 | 0/0 |
| 6 ネイチャーゲーム(自然を利用したゲーム) | 58/26 | 21/10 | 9/4 | 2/1 | 0/0 |
| 7 火起こし(薪、枯れ葉等を使っての焚火) | 43/20 | 31/14 | 15/5 | 3/1 | 0/1 |
| 8 飲み水の確保(雨水、川の水をろ過、浄水) | 76/31 | 9/7 | 4/1 | 0/1 | 0/1 |
| 9 負傷者の運搬法 | 39/23 | 21/12 | 1/5 | 3/1 | 0/0 |
| 10 負傷者の応急処置 | 53/20 | 21/12 | 14/9 | 3/0 | 0/0 |

調査結果の表2から、災害時に必要となる、ライフラインの確保について経験と技術もある程度備えている学生は、全体の1~3%に過ぎなかった。自然災害時は、緊張感が続きそれが原因で体調不良を起こす被災者も少なくない。自らの体調、健康、生活を保持し、辛い境遇の中でも笑顔と前向きな姿勢を忘れないことが重要である。指導者であれば、児童・生徒を元気づけ、非常事態の中でも生きる力を育ませ、希望を持たせるだけの知識と技術を修得しておきたい。この実習の中で、学生がそういった技術、体験を自分のものにできることを望みたい。

Ⅲ. 自然活動論とアウトドア実習Ⅱの指導目標の違いから学生に与える教育的効果について

1. 自然活動論実習の概要

(1) 目的

本科目がスポーツ教育学科専攻学生の必修科目として位置づけられている理由は、自然体験に高い教育的価値が認められているからである。日本は、自然災害を常に意識していなければならないほど災害が多発している国である。しかし、災害に対しての危機管理が学校教育にも不足しているように感じる。この授業では3泊4日の実習をとおして、自ら

を厳しい自然環境に身をおき、自然活動の意義や必要性を実感するとともに、自然災害発生時に、的確な状況判断ができ、正しい行動がとれるよう、常に備える気構えと行動を学ぶ。そして教職に就いたとき、児童・生徒の命を守り、災害時であっても生徒たちに不安を与えず、生きる力を育ませることのできる指導者として、資質、能力を養うことが本科目の最終的な目的である。

(2) 実習地

南房総市 大房岬自然の家

(3) 実習を中心においた自然活動論の授業の流れ【事前指導2回】

1 回目：実習の目的とその内容の説明

2 回目：実習要項を配布

【実習日程】

2018 年 2 月 12 日 (火) ～ 2 月 15 日 (金)

(3 泊 4 日)

【自然活動論タイムテーブル】

表 3

| 時間 | 2月12日(火) | 2月13日(水) | 2月14日(木) | 2月15日(金) |
|-------|-----------------------------|--------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| 6:00 | | 起床 朝の寒い 朝食準備 | 起床 朝の寒い 朝食準備 | 起床 朝の寒い 朝食準備 |
| 7:00 | 8:00 大学集合 出発 | 朝食準備 朝食 | 朝食準備 朝食 | 朝食準備 朝食 |
| 8:00 | | プロジェクトアドベンチャー: 1+1 (表はクラフト) | ロングウォーク 30～40km | 片付け(暮活活動) 課題「災害時の対応」 昼食 |
| 9:00 | | 朝食準備 朝食 | 朝食準備 朝食 | |
| 10:00 | | | | |
| 11:00 | | | | |
| 12:00 | | | | |
| 13:00 | 開校式 オリエンテーション アイスブレイク | プロジェクトアドベンチャー: 2+2 (表はクラフト) | ゴール後 パーティー準備 ファイナルパーティー | 開校式 建所 |
| 14:00 | 夕食準備 野外炊事 | 夕食準備 野外炊事 | | |
| 15:00 | 夕食 | 夕食 | | 大学到着・解散 |
| 16:00 | | | | |
| 17:00 | | | | |
| 18:00 | | | | |
| 19:00 | ふり回り 入浴 | ふり回り ナイトシアター 入浴 | ボンファイヤー | |
| 20:00 | 就寝準備 体育館着泊・就寝① | 就寝準備 体育館着泊・就寝② | 就寝準備 就寝 | |
| 21:00 | | | | |
| 22:00 | | | | |
| 23:00 | | | | |

【教育学科学生が深く取り組んだ授業課題】

「プロジェクトアドベンチャー」³⁾、「ロングウォーク」⁴⁾、「ライフクラフト」⁵⁾

2. アウトドア実習Ⅱの概要

(1) 目的

自然の中で様々なアウトドア活動を体験することを通して、自然の豊かさや厳しさを体験的に学び、自らの「からだ」への気づきを深めるとともに、アウトドア活動を実施する上で必要となる知識や技能を学ぶことである。またアウトドア活動を通して自然・環境・社

会・自己の関係性を見直し、現代社会におけるアウトドア活動の文化・社会的意義を考えていくものと設定している。アウトドア実習Ⅱでは、雪上での活動を主としてクロスカントリースキー、スノーシューハイク、雪上運動会、雪洞づくり等を実施し、雪上でのアウトドアアクティビティの可能性を探るものである。

(2) 実習地

国立妙高青少年自然の家

(3) 実習実施に関する授業展開

事前指導3回、実習3泊4日、事後指導2回

事前指導3回：指導内容

1 回目：実習の目的とその内容について
説明、他

2 回目：活動内容に伴う準備物について
の説明、他

3 回目：実習要項の配布と活動グループ
ワークの実施、他

事後指導2回：指導内容

1 回目：実習実施までのロードマップに
ついての説明、他

2 回目：課題レポートの作成およびス
ポーツツーリズムに着目した企画案の作
成、他

【実習日程】

2019 年 2 月 11 日 (月) ～ 2 月 14 日 (木)

(3 泊 4 日)

【アウトドア実習Ⅱタイムテーブル】

表 4

| 時間 | 2月11日(月) | 2月12日(火) | 2月13日(水) | 2月14日(木) |
|-------|-----------------------------|--------------------|----------------------|------------------|
| 7:00 | | 起床 朝食 | 起床 朝食 | 起床 朝食 |
| 8:00 | 大学出発 | スノーシューハイク | クロスカントリースキー | ポエムづくり スタンジ発表 |
| 9:00 | | | | |
| 10:00 | | 昼食 | 昼食 | 昼食 |
| 11:00 | | | | |
| 12:00 | | | | |
| 13:00 | | 雪洞づくり | 雪上運動会 | 開校式 |
| 14:00 | | | | |
| 15:00 | 開校式 オリエンテーション アイスブレイク | | | |
| 16:00 | 雪上走り 夕食 | 夕食 | 夕食 | 大学解散 |
| 17:00 | | | | |
| 18:00 | | | | |
| 19:00 | 昼食準備 振り回り 入浴 | 雪洞確認 振り回り 入浴 | 振り回り スタンジ作成 入浴 | |
| 20:00 | | | | |
| 21:00 | | | | |
| 22:00 | | | | |
| 23:00 | | | | |

IV. 実習後の調査

実習終了後にそれぞれの実習に関する調査を実施した。

表 5

【実習後の調査】：a.理解・満足できた b.理解・満足できなかった c.どちらとも言えない d.無回答

| 質問項目 | a | b | c | d |
|---|-------|-----|-------|-----|
| 1. 今回の実習を通じて自然活動論（アウトドア実習Ⅱ）の意義や目的は理解できましたか？ | 88/92 | 0/0 | 0/1 | 0/0 |
| 2. 今回利用した施設の設備（部屋、洗面所、浴場、暖房）等には満足していますか？ | 83/92 | 2/2 | 12/19 | 0/0 |
| 3. 実技・実習を伴うプログラムの内容には等には満足していますか？ | 82/99 | 0/0 | 5/4 | 0/0 |
| 4. 講義によるプログラムの内容には等には満足していますか？ | 92/93 | 1/0 | 5/10 | 0/0 |
| 7. プログラムを担当した指導者には | 85/93 | 1/1 | 2/11 | 0/0 |
| 8. 食事のメニュー等については | 75/99 | 4/0 | 9/4 | 0/0 |
| 9. 概して言うと、今回の実習には | 82/91 | 1/0 | 4/2 | 0/0 |
| 10. 自然活動論・実習という授業を考えた場合、今回の実習は | 83/95 | 1/0 | 4/8 | 0/0 |

5-1 自然活動論を通じてプログラムの中で最も楽しかったと思うものを1つ挙げてください

| | プログラムの中で最も楽しかった | 回答数 |
|---|-----------------|-----|
| 1 | プロジェクトアドベンチャー | 66 |
| 2 | ロングウォーク | 14 |
| 3 | ライフクラフト | 5 |
| 4 | 野外調理 | 3 |
| 5 | ボンファイヤー | 2 |

5-2. 自然活動論のプログラムの中で最も充実していたと思うものを1つ挙げてください

| | プログラムの中で最も充実していた | 回答数 |
|---|------------------|-----|
| 1 | プロジェクトアドベンチャー | 38 |
| 2 | ロングウォーク | 37 |
| 3 | クラフト | 3 |
| 4 | 野外調理 | 8 |
| 5 | ボンファイヤー | 1 |
| 6 | 体育館宿泊 | 1 |

6-1 アウトドア実習Ⅱの活動プログラムの中で最も楽しかったと思うものを1つ挙げてください。

| | プログラム内容 | 回答数 |
|---|-------------|-----|
| A | そり | 2 |
| B | 星座鑑別 | 0 |
| C | スノーシュー・ハイク | 2 |
| D | 雪洞づくり | 7 |
| E | 雪灯籠 | 0 |
| F | クロスカントリースキー | 10 |
| G | 雪上運動会 | 17 |
| H | ボニムづくり | 0 |
| I | スタンツ | 5 |

2-2 アウトドア実習Ⅱの活動プログラムの中で最もつまらなかったと思うものを1つ挙げてください。

| | プログラム内容 | 回答数 |
|---|-------------|-----|
| A | そり | 2 |
| B | 星座鑑別 | 24 |
| C | スノーシュー・ハイク | 1 |
| D | 雪洞づくり | 0 |
| E | 雪灯籠 | 2 |
| F | クロスカントリースキー | 0 |
| G | 雪上運動会 | 0 |
| H | ボニムづくり | 14 |
| I | スタンツ | 0 |

V. 考察・今後の実習に向けて～実習後の質問調査から～

今回、2学科とも自然体験活動の活動経験と実習後の興味を持った授業教材、アクティビティーについて調査をおこなった。どちらの学科においても「楽しかった」と答えたプログラムは、自然活動論では、プロジェクト

アドベンチャー、アウトドア実習Ⅱでは、雪上運動会で、どちらのアクティビティーも学生同士が課題に向けて相談し、役割、戦術を考え実行する。成功時にはみんなで喜べるような、課題解決型の教材に興味を示し、チームワークを再認識したようである。自由記述の感想文でも、失敗後の成功体験が思い出に残っているという感想が多く見られた。

実習別で明らかになったことで、まず自然活動論実習では自然災害を強く意識した教材を用意し、実施しているが、学生の活動報告から興味深い2つの結果が見られた。

一つ目は、2日目に実施したライフクラフトとプロジェクトアドベンチャーで、課題をグループ一人ひとりが達成できないと次に進めないような教材を用意した。ライフクラフトでは、ロープワーク、プロジェクトアドベンチャーでは、トラストフォールを実施した。ロープワークでの課題は災害時に必要になる、「もやい結び」、どのような状況でも結びが緩まない「巻結び」、ひもを接続する「本結び」の3つの結び方を、制限時間内（30分以内）にグループ全員が使えるようにすることにした。決して難しい結び方ではないが、全員ができるようになったかのテスト等を、学内の授業で実施すると、必ず少数ではあるが間違える学生が出てくるが、屋外での実習では、その技術がすぐに必要になる場所で実施しているせいなのか、できなかった学生は一人も出なかった。また、トラストフォールは、グループのメンバーを信頼し、立位から後ろ向きに倒れていくという課題で、勇気と決断が必要となる。この課題においてもグループごとの相談ののち一人ずつ行ったが、躊躇する学生が見られなかった。以上の結果から屋内で学習している時より、屋外だからこそ理解が深まったり、行動的になる要素がありそうだ。

二つ目は、3日目に行われたロングウォークにおいて、グループはランダムに男女混合のグループにわけ、運動部が揃わないようにも心がけた。その結果、持久性体力のない学

生は10km前後でばて始めてしまう。グループはまとまって行動することを最初に指示してあるので、自然と弱者のペースに合わせるようになってくる。ゴールに近づくにつれ、弱い友人の荷物を持って歩く学生、肩を貸したり、足の皮がむけた仲間を、騎馬を作り担ぎ上げる集団など、仲間意識は育まれたように思う。自習後の感想でも「ロングウォークは、辛い課題ではあったが、得るものも大きかった」という感想が多く見られた。

アウトドア実習Ⅱの活動プログラムは、「身体活動」、「知的活動」、「情意的・文化芸術的活動」の3つの活動を複合的に取り入れた。

調査結果が示している通り、履修者の多くは「身体活動」に位置付けた雪上運動会やクロスカントリースキーのプログラムを楽しんでいると感じていたが、同じ身体活動であるスノーシューハイクやそりへの評価は低いものとなった。この要因は示す背景には、例えば雪上運動会では予め種目での着順や成果を得点化し、表彰するなどの競技会要素を高めたことでチーム力を高めるなかで学生同士の交流が深まったことにあると考えられる。クロスカントリースキーでは、非日常的な活動である用具や装備を身に付け、普段経験することのない、滑るまたは滑り降りるといった行為や仲間が上手に滑ったり、転倒したりなどの行為への興味関心といった技術の上達や内面性の高揚感などが関係しているものと想定している。

一方、星座観察やポエムづくりなどの「知的活動」や「情意的・文化芸術的活動」に対する満足度は著しく低いことが理解された。星座観察では、当初予定していた望遠レンズを用いた天体観察が天候不良のため実施することが出来なかった。その為、講義室にてプロジェクターを用いての星座の解説となり、幾分リアリティに欠けることが要因であったかもしれない。また、ポエムづくりでは、実習で思い出に残った一コマをテーマに詩と絵を作成するものであったが、詩と絵を作成す

ること自体を不得意とする学生が多くいたことが活動プログラムの取り組みから理解された。

これらアウトドア実習Ⅱの様子を鑑みると、身体活動の質と量を十分に考慮しながら、さらにグループワークを伴う場合にはグループ作り、つまりメンバーの構成に配慮が必要になるとも考えられるであろう。また、学生のイメージにおいて、野外教育＝「身体活動」とする限定的な理解が深まっているとすれば、「知的活動」や「情意的・文化芸術的活動」の教材開発が求められるかもしれない。

本学部で開講している自然活動論Ⅰ・Ⅱ（実習含む）やアウトドア実習Ⅱ、アウトドア実習Ⅰなどの野外教育関連科目の教育的優位性は、従前の野外教育研究活動において頻繁に論じられている。しかしながら、本学に入学した学生を対象とした大学入学以前における野外教育活動への取り組みを参照してみると、野外教育活動への取り組み頻度が著しく低いことが理解された。これは学校や家庭といった枠組みの中で、野外教育活動を行っていない実態を明らかとしている。つまり、研究レベルでは野外教育活動は教育的効果が高いことを明らかとしながらも、その成果が現場レベルへ浸透していないということであろう。

学生の自然体験活動の経験値は、学校や家庭、時間や費用、自然環境などの3つの要因が関係していることが認識できる。学校教育機関における野外教育活動の多くは、児童・生徒・学生などがグループワークを伴いながら実施する活動プログラムが多く、互いに交流しながら、教え合い・学び合う環境が備わっている。これは自然災害の避難所生活等で求められる協同することや共助するといった精神を養うことに繋がっているかもしれない。自然環境の悪化が問題視されている昨今、自然体験活動は、自らが自然の一部であることを理解し、自然に対する畏敬の念を育ませ、今後の環境破壊に歯止めをかけられるように、地球規模で研究、指導ができる教員の育成が

急務になってきている。

【注】

1) 中村：中村和彦

山梨大学教授 文部科学省中央教育審議スポーツ・青少年分科会スポーツ振興に関する特別委員会委員。文部科学省小学校学習指導要領解説体育編作成協力者。日本体育協会ジュニアスポーツ指導員部会会長日本オリンピック委員会 (JOC) ゴールドプラン専門委員会委員、NHK 教育テレビ番組「からだであそぼ」[1]「あさだ!からだ!」「おかあさんといっしょ」[監修など。『子どものからだが危ない』(日本標準) など著書多数。

2) 石原：石原結實

長崎市生まれ。長崎大学医学部 (卒) 及び同大学院博士課程 (修了)。医学博士。薬物投与に頼らない、免疫力を上げる食事療法等で有名。著書は 197『病気はかならず治る』(善本社)。ベストセラーになった『生姜力』『体を温めると病気は必ず治る』『医者いらずの食べ物事典』他。

3) プロジェクトアドベンチャーとは

プロジェクトアドベンチャーは、1971 年にマサチューセッツ州にあるハミルトンウェンハム高校の校長 J. ペイ (Pieh, J.) を中心とするスタッフの手で設立された。ペイの父親 (B. ペイ、カナダ・トロントにあるキーンズ・カレッジの名誉教授) は、アウトワード・バウンド・スクール (OBS) ミネソタ校の創設者である。父親の影響を受け OBS にかかわってきた J. ペイは、次第に OBS を学校教育の現場に活かさないだろうか考えるようになった。しかし、OBS のコースは厳しすぎるし、費用や時間の点からいっても青少年には参加しにくかった。そこで J. ペイは OBS の考え方を既存の学校制度に組み込むことができないかと考えたのである。そして、この計画の名称を考えるにあたってアウトワ

ード・バウンドという言葉には、自然の中に出かけていくというイメージが強いので、この名称をそのまま使わずに「人々に夢を与える限らない広がり」というイメージから、アドベンチャーという名称を選んだ。(「アドベンチャーグループカウンセリングの実践」CSL 刊より引用)

このプログラムを実施することによって、参加学生の意識を一方向に向け、グループの課題達成のために、自らの感情、欲求を抑え、協調性を育み、達成感を味わうことができる。プロジェクトアドベンチャーには挑戦の規模によって、ローエレメントとハイエレメントに分けられる。今回、使用させていただいた大房岬自然の家にはハイエレメントの施設はなく、施設員の手作りの教材でローエレメントを実施した。実施したアクティビティーは以下の通りである。

①オエールウォッチング、②ニトロクリッキング、③丸太わり、④トラストフォール、⑤スパイダーウェブ

4) ロングウォークとは

災害時に公共交通機関は完全に停止し、帰宅難民といわれる通勤、通学者が東日本大震災の時の都会には多く見られた。実際の災害時でセーフティエリアといわれる場所までの移動距離は、50km 以内といわれている。しかし、地震による橋や建物の倒壊により迂回を余儀なくされることが多く、体力的、精神的にも疲労してしまい帰宅を諦めることも少なくない。児童・生徒を連れて安全な場所への移動は、情報を読み取り、子どもたちに声をかけながら子供たちのペースで歩かなければならない。日常では、2～3km も歩けば十分な状態になるが、災害時にはその 10 倍以上の距離を移動することとなる。人生で 1 度でも長い距離を歩いたことのある経験者であれば、安全への配慮等の考えながらペース配分し、歩行での移動を決断、実行してくれるものと考え、今回は 30km を歩いて移動することとした。移動途中には、5km 程にエイドエ

リアを設け、水分、栄養補給ができるように配慮した。また、公共機関（役所等）や移動経路にある店舗には、学生の立ち寄り、トイレ等の使用依頼にも応じていただけるよう、事前に協力を依頼した。

8:30～1 班スタート



15km 付近まだ余裕がみられる



25km 地点表情が険しい



ながら制作している時間は、大学とは違う時間が流れていると、学生たちはのちの感想にも書かれていた。

【参考文献】

- 「自然活動学のすすめ」塚本珪一著、1980 年、岳書房
- 「自然活動の計画と指導」大出一水編集、1985 年、遊戯社
- 「使えるロープワーク」太田潤著、1999 年、大泉書店
- 「教養としてのアウトドア 自然活動入門」岸 梢夫編著、1992 年、アイオーエム
- 「震災自衛マニュアル」長濱慶和・松島悠佐著、1999 年、大村書店
- 「現在の防災教育における課題」、文部科学省、2009 年
- 「学校教育における自然体験活動の実践力育成を目指した授業内容の検討」西野明他、千葉大学教育学部研究紀要、第 66 巻、第 2 号、153～156 頁、2018 年

5) ライフクラフトとは

自然災害時では、普段の生活では当たり前にあるものが失われ、衣食住に支障をきたすことになる。今回は、実習のおよそ 4 時間の中で、「食事の時に利用するもの」というテーマで作成させた。条件としては作成したものを実習中は利用し食事をすることにした。学生たちは、箸、フォーク、スプーン、湯飲み等、食器を中心に作成した。屋外の陽だまりの中で、自由に会話し